「酒は世につれ…」



「歌は世につれ世は歌につれ」は酒飲みにも当てはまる。近世（江戸から明治末）は農民社会。厳しい労働の日々が続く。だが、地域の祭礼や冠婚葬祭など特別な日には酒を飲む。昼から夜までしこたま飲む。「酔わねばならぬ義務があった」。村落の飲酒は、地域共同体員の連帯を確認し合う重要な儀礼だった。

酒飲みは、禁欲を強いられる日々から離れ、陶酔し我を忘れる心身状態を喚起する行為。〝明日のことなど頭にない〟。飲んで、飲んで…。酒をこぼし、戸や障子を破り、酔い潰れる。酒の多くは米粒の形が残るどぶろく。農村社会の酒は一時的にせよ労働を離脱し、額に汗した結晶である米を消費する。そこには反労働的、浪費的意味合いが含まれていた。

農民以上に昼飲みの慣行があったのは職人。昼飲みを提供するのは、依頼主の義務であり、普請振る舞いと呼ばれた。共同体の部外者である職人と飲むことにより、村の一員として包摂することが、作業の正確さより重要だった。村落の酒飲みは、集団で一体感を味わい、労働からの解放を享受する非日常の象徴だった。

明治末から大正にかけて、日本は急速に工業化する。都会にサラリーマンが生まれ、工場労働者が増える。労働力の保全や生産性の向上に飲酒は害となりやすい。行政も経営者も飲酒抑制に乗り出す。社会全体に、じわじわと「理性と禁欲」の近代的倫理観が浸透してくる。

勤労者が飲食したのは、仕事から離れた場所と時間だった。以前の盛り場は昼の世界に属していた。照明、交通機関、娯楽的魅力に乏しく、夜に飲む習慣が普及していなかったことによる。昭和に入るとこれらも整い「カフェー」や「バー」などの享楽的空間は、昼の疲れを癒すサラリーマンの「解放区」となった。

といっても、誰もが労働への備えは怠らない。どれほど飲んでも必ず家に帰る。終電の時刻が近づくと盛り場から一斉に人が消え、深夜のターミナル駅は酔っぱらいでごったがえす。翌日頭が痛くても、フラフラしても定時に出勤する。

次第に、夜や休日に酒場や家庭で飲むのが一般的になる。乱痴気騒ぎや記憶喪失は恥とされる。夜は労働からの解放を謳歌する時間だが〝明日のことなど構っちゃいられねえ！〟とはいかない。悲しいかな、社会システムに組み込まれた現代人は、仕事が頭から離れない。余暇は労働の時間と厳密に切り分けられながら、一方では労働と深く結びついている。

「理性と禁欲」の職業倫理が飲酒の習慣に反映するのは当然。生活の中心は労働であり、飲酒はこれを阻害しない範囲で行うべきものとされた。飲酒は労働に従属したといえる。特別な日に一切を放念して仲間と大飲。「酒狂」が当然とされた社会とは様相を全く異にしている。

やがてビールが登場する。アルコール度数が低く、滋養があるとのイメージが広まる。経済成長期、ビールの需要は劇的に伸びた。〝二日酔いしない〟ビールは、企業戦士にとって格好の飲料となる。アルコールが完全に労働補給的な役割を持ったことを意味する。農村でもビールは人気になった。これは共同体の弱体化とも関係しているように思える。酒飲みは社会のあり様と結びついている。

最近はノンアルコールが人気だ。この15年間で3倍伸び、清酒の消費量に匹敵している。一方で、酒にまつわる意義や文化が薄れ、単なる液体になりつつある。勿論、今日の勤労者にも酒を飲むことは愉悦である。だが、勤労者が酒に見い出した価値は少しずつ遠ざかっている。

〝どうだ今夜飲みに行くか〟〝課長それは仕事ですか〟の時代。孤の世界に籠り、他との一体感を求めない人たちが増えている。1人、生成ＡＩ相手に杯を傾ける？何とも寂しい光景だ。今後人と酒との付き合いはどうなるのであろう。